

開催日	令和元年12月26日	時 間	10:00~12:00
場 所	区民活動センターAB会議室	出席人数	13名
講 師	真田雅行氏	作成者	松本和俊
テーマ	第二学習 外国通覧(大黒屋光太夫帰国後の尋問) と処遇①		
概 要	<p>寛政5癸丑年9月18日、將軍家斉の御前において、ロシアから帰国した伊勢の船頭・大黒屋光太夫(本書では幸太夫)と水主・磯吉が幕府から尋問を受ける。將軍は御簾の中におり、左右に前任の老中首座・松平越中守定信をはじめ、幕閣、役人が列座。</p> <p>尋問を受ける光太夫と磯吉は白洲に置かれた床几に腰掛ける。その際のいでたちは、光太夫は髪を後ろに長く垂らし、絹の紐で束ね、黒毛織の笠(帽子)を脇にはさむ。衣服は、襟には黄金作りの小さな鏡のようなものを付け、銀モール、ボタンなどを施しあかかも紅毛人(西洋人)のようである。磯吉もほぼ同じ。</p> <p>彼等の尋問に対する答えは的実で、いささかの虚説もない。記録係桂川甫周は「誠に千古の一大奇事也」と記している。</p> <p>尋問と答えは次の通り。</p> <p>○問 最初に着船した所は何というところか。</p> <p>答え アミシツカという島で4年滞留。食事は、魚の潮煮と百合根など。</p> <p>次いで、カムシャツカという地に移る。ここで乗組員6人が死亡。次の地オホッカ以降は厳寒の地で、冬の外出には毛皮を着し、顔は狐の皮で蔽う。寒気を受ければ手足も脱落する。乗組仲間の庄蔵は片足を失った。</p> <p>イルクーツクではロシア人になるように勧められたが、帰国したくて願を出すも、一向に埒が明かない。願いが途中で止まって女帝へ達していないことが分かったので、光太夫は都ペテルブルグへ上り、女帝へ直訴することとした。この旅では、キリロ・ラクスマンという者に大変お世話になった。</p> <p>女帝には離宮で拝謁、早速帰国を許される。</p> <p>この王城の構えは、煉土(煉瓦)あるいは石にて五重六重に造り、二重目、三重目には築山や泉水を設けている。畑なども設けている。</p> <p>家作については、王城も平人の家もあまり変わらない。</p> <p>○問 火災の状況はどうか。</p> <p>答え 先に答えた通り、家は大体煉土で出来ているので、火災は少ない。滞在中に2度あっただけである。2階で火事があっても3階は関係ない。まして隣家に燃え移ることはない。家財、内部造作が消失するだけである。</p> <p>(以下、次回に続く)</p>		
次回予定	令和2年1月9日 10:00~12:00 於: 区民活動センターAB会議室 第一学習 磯子村久木 堤家文書④		